

小児期の粘液嚢胞に微小開窓法を施した3例

○西田郁子¹、橋本敏昭²、空田安博³、牧 憲司¹

1. 九州歯科大学口腔機能発達学分野
2. ほしもと小児・矯正歯科
3. そらだ小児歯科医院

【目的】

粘液嚢胞とは、「口の粘膜を咬んだり、異物が刺さることなどにより、唾液が出てくる管が閉塞して唾液が貯まったり、唾液の出る管が破れて、唾液が漏れだしてその周囲を線維性の薄い組織が取り囲むことにより生じる嚢胞」である。処置法として、経過観察、摘出、微小開窓法が挙げられる。小児期では、低年齢の為、外科的処置が困難なことも多い。今回小児期に遭遇した粘液嚢胞に対して微小開窓法を行った3症例について報告する。

【症例】

症例1

年齢・性別：3歳1か月・男児

主訴：舌の裏に水疱がある。

現病歴：1年くらい前から舌の裏に水泡のようなできものがあった。歯科検診で経過観察が良いとのことで様子を見ていたが、最近気になるようで嘔んで出血することがある。

口腔内所見：Hellmanの歯齡IIA期。舌の裏の正中、中央部に境界明瞭な小豆大の腫瘍を認めた。腫瘍は弾性軟で、波動を触れた。自発痛、圧痛は認めない。

臨床診断：Blandin-Nuhn嚢胞

処置・経過：低年齢であることを考慮し、表面麻酔後、微小開窓法を施行した。施行後、翌日歯磨きの時に縫合糸が外れた。腫瘍は、一時縮小したが、その後腫脹した。縫合糸が脱落したため、縫合糸の数を増やし、2回再縫合を行った。1か月後、腫瘍は消失し、その後再発は認められない。

症例2

年齢・性別：8歳9か月・男児

主訴：舌の裏の腫瘍

現病歴：8か月前に舌の裏の腫瘍に気づいた。

その後、腫脹、縮小を繰り返している。

口腔内所見：Hellmanの歯齡III A期。舌の正中、前方1/3の部位に小豆大の境界明瞭な腫瘍を認めた。弾性軟で波動を触れた。

臨床診断：Blandin-Nuhn嚢胞。

処置・経過：表面麻酔後、微小開窓法を施行した。1週間後ジュースを飲んでいたら、縫合糸が脱落した。腫瘍は縮小していたが、再度縫合を行った。その1週間後さらに腫瘍は縮小し、その1週間後腫瘍は消失し、再発は認められない。

症例3

年齢・性別：12歳5か月・男児

主訴：舌の裏の腫瘍

現病歴：2か月まえ、舌尖部の膨らみに気づき、小児科を受診。デキササルチン口腔用軟膏を処方されたが、腫脹、縮小を繰り返している。

口腔内所見：Hellmanの歯齡IVA期。舌の裏の正中、舌尖部に境界明瞭な小豆大の腫瘍を認めた。腫瘍は弾性軟で波動を触れた。

診断：Blandin-Nuhn嚢胞

処置・経過：微小開窓法を施行した。施行後、腫瘍は小さくなったが、食事時にパンがあたり、再度大きくなったと来院した。腫瘍は初診時より小さくなっており、再縫合を行った。2週間後、腫瘍は消失し、再発は認められない。

【結果・考察】

今回、小児期に発症したBlandin-Nuhn嚢胞3例に微小開窓法を施行した。その結果、再縫合が必要であったが、3例とも良好な経過を示した。但し、低年齢児においては、縫合によりかえって腫瘍部位が気になり、触ってしまい、縫合糸が脱落傾向にあるので注意が必要と考えられた。微小開窓法は、処置が簡単で侵襲も小さいため小児期に発症した粘液嚢胞には有効な方法であると考えられる。

【文献】

粘液嚢胞に対する微小開窓法(micro-marsupialization)の臨床的検討。日本口腔外科学雑誌60、672-676、2014。